

故伊藤明彦さんの業績 書籍に

「残した被爆者の声 人類の遺産」

全国の被爆者の証言収集に生涯をささげた元長崎放送記者の伊藤明彦さん(2009年に72歳で死去)。絶版状態の著書を「復刊」し、音声作品を活字にして書籍化することで業績を後世に伝えたいと、長崎市の編集者、西浩孝さん(42)が「伊藤明彦の仕事」第1巻を今月10日付で発刊した。シリーズ化し、今後10年ほどかけて全6巻の刊行を計画している。

伊藤さんは長崎の入市被爆者。長崎放送入社後の1968年、「被爆証言の記録は被爆地のジャーナリストの使命」との信念から被爆者が体験を語るラジオ番組を始め、70年に会社を辞めると退職金で購入した録音機を携え、個人で全国の被爆者約2千人を訪ね歩き、1003人分の音声証言を収録。録音テープ

を全国の図書館などに寄贈した。2008年、吉川英治文化賞を受賞。284人分の音声証言と265人分の映像証言はウェブサイトに「被爆者の声」で視聴できる。

長崎の編集者 西さん



シリーズ「伊藤明彦の仕事」第1巻を持つ西さん(長崎市長崎新聞社)

第1巻発刊 シリーズ化を計画

古書店でたまたま伊藤さんの著書「未来からの遺言」を手に取った。「未来からの遺言」は、伊藤さんが長崎で被爆したという男性と出会い、肉親の死や病との闘いや苦難に満ちた半生に心を打たれるが、その証言に多くの謎が含まれていたという実話を描いた。男性の証言は無数の原爆犠牲者の声の1人の「被爆太郎」の物語に凝縮された「被爆民話」だと考察し、被爆者とは何かを根底から問い直している。

「原爆と人間の関係を深く考察している。読み始めて、こんなすごい本があったのかと心が震えた」。伊藤さんに興味を持った西さんは「被爆者の声」の存在を知り、サイトを管理する古川義久さん(今年1月に69歳で

死去)にすぐにメール。古川さんから伊藤さんとの思い出などを聞き、西さんは「生きざまに非常に胸を打たれた」。だが伊藤さんの存在を知る人は長崎でも少なく、著書は古書でも手に入りやすく、音声作品も含め活用がほばされていない。「原爆投下は人類史的な出来事であり、伊藤さんが残した『声』は人類の遺産。多くの人に届けることは編集者として価値ある仕事」と書籍化を決意した。

第1巻は「未来からの遺言」と、伊藤さんが同書を基に映画のシナリオとしてまとめた「被爆太郎伝説」を収録。2、3巻では残りの著書2作品、4巻では未発表の歌集、5、6巻は証言を基にした音声作品を活字化する計画。

西さんは「作品を通じて知る被爆者の話はただ暗く陰惨なものではなく、人間的な強さや輝きに満ちている。多くの人に読んでもらえたら」と話す。

第1巻は西さんが運営する「編集室 水平線」発行。四六判、356頁。2420円。店頭に並ぶのは今月下旬の予定。

(養川裕之)



被爆者の証言収集を続けた伊藤さん(2007年8月、長崎市)